

幸島・屋久島出張報告書

報告者: 京都大学霊長類研究所 思考言語分野
日本学術振興会特別研究員 川上文人

1. 出張期間

2013年12月11日から12月17日

2. 主たる訪問先

幸島(京都大学野生動物研究センター幸島観察所)

屋久島(京都大学野生動物研究センター屋久島観察ステーション)

3. 同行者(敬称略)

Anna-Katharina Laboissiere (Ecole Normale Supérieure)

綿貫宏史朗 (京都大学霊長類研究所)

4. 出張目的

報告者が実施していた、飼育下のニホンザル新生児における睡眠中の笑顔表出の観察研究について、野生のニホンザルの日常生活の様子から考察を加えることを目的とした。先行研究においてニホンザルが笑顔を見せることは示されているが、報告者は野生ニホンザルの覚醒中の笑顔を観察した経験がなかった。周囲に人々が少ない環境において野生のニホンザルを間近で観察できる幸島と屋久島への訪問は、彼ら本来の感情表出を観察する重要な機会であると考えられる。

5. 出張内容

宮崎県串間市の幸島、鹿児島県熊毛郡の屋久島への移動は時間を要するもので、本格的に観察ができたのは、幸島における12日、屋久島における14日から16日のみであった。幸島での観察、屋久島での観察の順で述べていく。

1) 幸島

幸島には観察所を9時半に出発してボートで渡り、その日の午前中を砂浜でニホンザルたちとともに過ごした。ボートが岩場に着くやいなや、乳児を抱えた母ザルが船に乗り込んでくるほど、幸島のサルは人慣れしていた。砂浜には50個体ほどのニホンザルがおり、はじめは打ち上げられたタコを5個体ほどで取り合っていた。タコははじめ、基本的には1個体が独占したようであったが、おそらく栄養価の高い頭の部分を食べると、周囲のプレッシャーもあってか脚の付いた部位を置いて去り、争奪戦となった。しばらくして麦をまくと比較的落ち着き、それぞれが食事をはじめた。7月生まれの乳児も、自分で地面の麦を食べる様子が見られた。天気もよく静かな砂浜において、サルたちが麦を咀嚼する「カチカチ」という音が非常に印象的であった。

この食事場面におけるサルの社会的な行動について2点が印象に残った。1つはアルファ・メールの存在感が非常に大きく、他個体がむやみに近づくことがなかったことである。彼の周囲2mほどは彼のテリトリであり、彼が動くと他個体も動き場所を空けるため、彼

が威嚇する場面は見られなかった。

もう1点は、優位と見られる個体はアタックする振りをするだけで、相手の個体がスクリームしながら逃げる様子である。実際に取っ組み合いになることはこの場面においては見られず、優位個体は1, 2歩勢いをつけて邪魔な個体に近づくことで自らのテリトリを確保していた。習慣化した威嚇的な表出と、それを受ける表出が見られたといえる。威嚇に対する服従の表情であり、人間の笑顔の一部(smile)につながるものであるとされている、*silent bared-teeth display (SBT)*が見られなかったのは残念であった。

どちらの場面も厳しい争いを必要としない状況を物語っており、この群れにおける社会的な関係が安定的であることや、食料が豊富にあることを示しているといえるのではないだろうか。社会的な関係については、アルファである「カバ」以外にオトナオスはいないとのことで、脅威が少ないことが想像される。食料について、日々の麦まきは彼らの摂取カロリーの10から20%程度とのことであったが、砂浜の周辺にはダイダイの木も見られ、山にも多くの食料があるはずである。どちらにしても3時間程度の観察で多くは語れないが、ゆったりとした時間であったことはいうまでもない。

麦がきれいになくなったあとは、多くの個体が砂浜の端の岩場や木々のある部分に集まり、グルーミングや子どもたちは遊びに興じていた。グルーミングのターンテイキングにも興味を持ったが、より関心に近いのはおそらく6か月前後の乳児、数個体における遊びであった。ひとりでも3個体以上でもなく2個体での遊びのみであったが、その際に人間の笑顔のもう一方(laugh)とつながり、SBTよりも快楽的といわれる *relaxed open-mouth display (ROM)*らしき表情が複数回見られた(写真1, 2)。木につかまりながらであったり横向きであったりしたため、明確な画像ではないが、動画をスローで見ると明らかに口が開いている。



写真1. 乳児のROM(幸島)

写真2. 木で遊びながらの乳児のROM(幸島)

これまで Preuschoft & van Hooff (1995)において、ニホンザルにもROMが見られることは言及されているが、データは *personal observation* や *personal communication* に限られていた。おそらく普段からニホンザルの観察をしている研究者には、ニホンザルが笑顔を見せることは自明のことであるが、自分の目で見、ビデオに収めることができたのは非常に有意義であった。

2) 屋久島

屋久島では14日と16日にヤクニホンザルを観察し、15日は屋久島の山を歩き、動植物を見て過ごした。ここではヤクザルの観察についてのみ触れる。

14日の午前中、屋久島にフェリーで到着し、レンタカーを借り、そのまま屋久島を一周ドライブした。港や空港があり、レストランなど多くあるのは屋久島の東部と南部だが、ヤクザルやヤクシカが目当てであれば、島の西側、永田から栗生の区間を結ぶ、西部林道に行くのが確実である。16日に滞在した屋久島観察ステーションは、永田の西部林道入口付近にある。30kmに満たない道であるが、カーブが多く、双方向通行であるにも関わらず道が細く、動物がどこから飛び出すか予測できないこともあり、慣れない人間が車で走りきるには60分程度を要する。

西部林道に入ると、はじめにシカを目撃したが、間もなくヤクザルの群れに遭遇した。その群れ近くには、既に研究者たちと取材で訪問しているように見える5名程度の人々がいたが、それを気にしている様子は見られなかった。10分程度の観察であったが、その間にも取っ組み合いの遊びが見られ、その中で4歳前後の個体がROMらしきものを見せていた(写真3)。屋久島で見られた遊びは、ほとんどが複数個体間での取っ組み合い遊びであった。



写真 3. 4歳前後のROM(屋久島)

その後、西部林道に限らず、紀元杉などを見に山を登る際も数群れのヤクザルたちを見かけた。西部林道のサルたちは人慣れしているようで、我々が車を降りても逃げることはなかったが、それ以外の山道で出会ったサルたちを近くで観察することは出来なかった。

16日は、午前中に屋久島観察ステーションに入り、ヤクザルの研究者とともに10時半から14時半頃まで西部林道において観察を行った。運良く、研究者が担当している群れが林道上にいたため、様子をはっきり観察することが出来た。さらに幸運なことに、その群れが隣の群れのサルたちと対峙してしまう場面に遭遇し、その争いの様子を見る事が出来た。

「争い」というには非常に穏やかなもので、最前線にいた若オス同士が多少の接触をすることがあっても、攻撃的な争いに発展することはない。静かに一方の群れが進むと相手が引くという状態であった。最前線にいた隣群れの若オスは、こちらの群れの若オスが近づいただけで服従のサインといえるSBTを見せており(写真4)、やはりここでも表情をうまく使い、大きな抗争に発展するのが避けられていた点が印象的であった。

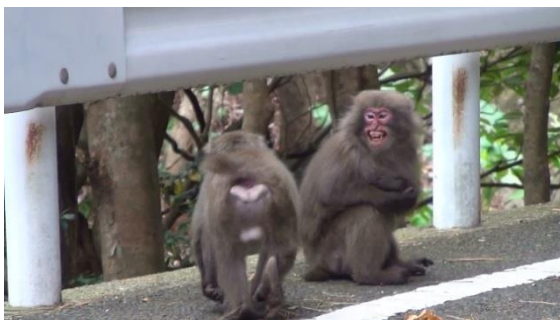


写真 4. 4-5歳のSBT(屋久島)

その「静かな争い」を象徴するように、前線近くであっても3歳前後の同じ群れ内の個体たちによる取っ組み合い遊びが生じていた(写真5, 6)。下が崖になっている道の端で行い、一方を落として終わるというものが多かったが、中でも興味深かったのが写真5に示した遊びであった。一方(A)が座り、もう一方(B)が仰向けに横になり頭をAの方に向けながら関わる様子は、限りなくチンパンジーの遊び方に近いものであった。Aの表情が撮影できなかったのは残念だが、Bの表情に関しては、明確にROMと言っているものである。



写真5. 取っ組み合い遊び中のROM(屋久島)



写真6. 3歳前後のROM(屋久島)

同じ状況下でひとり遊びといえそうな場面も見られた。周囲3m以上の範囲に誰もいない状態で、1個体がY字型になった枝を拾い(写真7)、それをくるくる回したり、それで地面を叩いたりしたという1分程度の場面であった。その間、表情を変えることはなく、どのように扱ったら良いか分からない様子で枝を持ち替えたりしている時間が多かった。途中、枝を片手に転げる場面があり(写真8)、それが何らかの快感情を反映するものであるとすれば、ひとり遊びであるという根拠が強くなるだろう。



写真7. Y字型の枝を発見しひとり遊び(屋久島)

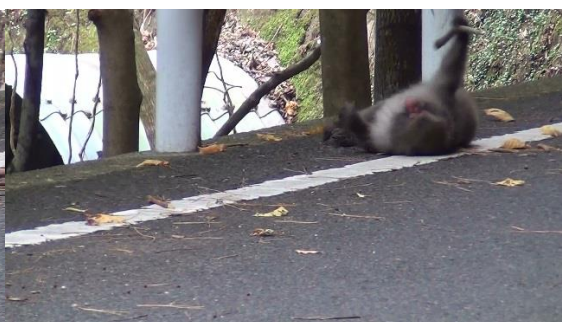


写真8. 枝を片手に転げる(屋久島)

その後、群れの移動を眺めたが、サルがいる木の下にはシカが常にいる様子が印象的であった。研究者の話では、ヤクシカの食事の約60%はサルが落としたものに依存しているとのことで、シカがサルに大きく依存している実情がうかがい知れた。

全体を通して、野生のニホンザルの社会的な営みを観察できた点が非常に有益であった。ニホンザルたちは多くの場面で表情を使ってコミュニケーションをとっていた。しかし、それらは快、不快、恐れといった感情を示すものであり、種類はそれほど多くないのではない

かと思われる。チンパンジーと比較すると、音声の種類も多くはなく、パントフートのような大きな範囲にとどろくようなものはなく、近距離のコミュニケーションに使われているように感じた。群れのサイズの影響も大きいと考えられる。

少ない種類の中でも、笑顔に関連すると思われる表情は多く見られ、おそらくその根源となっているのが、報告者が飼育下で観察していた新生児における睡眠中の笑顔表出なのであろう。笑顔は多く見られるものであるため、その根源が新生児期から見られるというのは自然なことであるといえる。

幸島、屋久島どちらに関しても、ニホンザルと人間が住み分けるという方法で、それぞれがよく生きている好例であるといえるのではなかろうか。単純過ぎる区分であり、私の関心に限った視点であるが、閉じた土地での文化の伝播や社会構成を見るのであれば幸島、ダイナミックな社会的交渉を見るのであれば屋久島が優れているのではないかと感じた。

6. 謝辞

本出張は、JSPS リーディング大学院構築事業費(プロジェクト名: 霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院)により経費の支援を受けて行われた。幸島、屋久島への訪問を後押ししてくださった松沢哲郎先生、友永雅己先生、幸島をご案内いただいた鈴木崇文さん、高橋明子さん、屋久島でお世話になりました栗原洋介さんに深く御礼申し上げます。